

2010年台湾五都市長選挙の分析（暫定版）

— 実質的に民進党の勝利, しかし通過点 —

東京外国語大学
小笠原 欣幸

2010年11月27日に投開票が行なわれた台湾の五都市長選挙は、国民党が三勝し数の上で勝利したが、五都全体の得票総数で民進党に大きく負け越した。民進党は二勝に終わったが、《表1》のように五都を合計した得票率で国民党を5.3ポイント、得票数で40万票も上回る成果をあげた。民進党の躍進と判断してよいであろう。《表2》の前回選挙(2005年および2006年)の数字と比べてみると、国民党から民進党へ大規模なスイングが発生したことが確認できる。国民党の得票率は52.1%から44.5%に7.6ポイント下落し、民進党の得票率は45.2%から49.9%へと4.7ポイント上昇した。得票数で見ると国民党は前回とまったく同じである。それに対し民進党は85万票増加した。国民党の44万票リードは民進党の40万票リードへとひっくり返ったのである。相対得票率の推移を示す《図1》のグラフを見れば、馬英九政権が信任されたと評価するのは奇妙に思えるであろう。

《表1》2010年五都市長選挙結果

	台北市	新北市	大台中市	大台南市	大高雄市	合計
国民党	55.65%	52.61%	51.12%	39.59%	20.52%	44.54%
	797,865	1,115,536	730,284	406,196	319,171	3,369,052
民進党	43.81%	47.39%	48.88%	60.41%	52.80%	49.87%
	628,129	1,004,900	698,358	619,897	821,089	3,772,373
無党籍	0.54%	0.00%	0.00%	0.00%	26.68%	5.59%
	7,742	0	0	0	414,950	422,692
投票率	70.65%	71.25%	73.15%	71.01%	72.52%	71.71%

民進党リード
403,321票

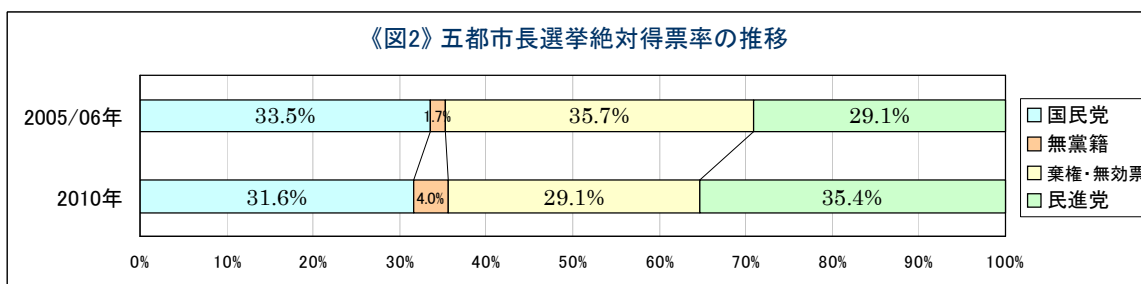
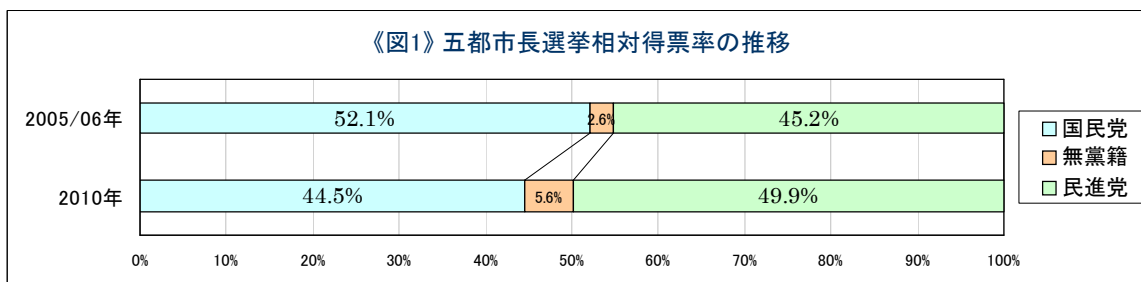
※ 本稿の図表はいずれも中央選挙委員会の資料に基づき筆者作成。

《表2》2005年&2006年県市長・直轄市長選挙結果

	台北市	新北市	大台中市	大台南市	大高雄市	合計
国民党	53.8%	54.9%	59.0%	45.0%	45.6%	52.1%
	692,085	988,739	680,811	385,135	622,318	3,369,088
民進党	40.9%	44.3%	39.1%	48.5%	53.7%	45.2%
	525,869	798,233	450,745	415,589	732,649	2,923,085
無党籍	5.3%	0.8%	1.9%	6.5%	0.7%	2.6%
	68,135	15,100	22,062	55,542	10,148	170,987
投票率	64.5%	66.3%	64.4%	62.7%	66.8%	65.2%

国民党リード
446,000票

※ 前回の台中縣市, 台南縣市, 高雄縣市の県市長選挙の投票結果をそれぞれ合算した。



《図1》の下のグラフの「無黨籍」の内訳は、高雄市で出馬した楊秋興の得票 5.5%とその他候補の 0.1%である。楊秋興が国民党支持者の票を集めたことから、その 41 万 5000 票を加えれば国民党と民進黨の得票率は同じであったとする見解がある。楊が国民党から分裂したのであればそのように考えることも可能であるが、楊は民進黨から分裂したのである。楊の得票のうち少なからぬ部分は民進黨系である。国民党に有利に見積もって楊の得票の 3 分の 2 が国民党系、3 分の 1 が民進黨系と仮定しても、国民党の得票率は 48.2%、民進黨は 51.7%となり、国民党が民進黨に負け越したことに変わりはない。むしろ、楊の得票を持ち出せば簡単に過半数を超える民進黨の得票率が光るだけである。グラフの形は文句のつけようのない民進黨勝利のパターンである。

両党の得票状況をさらに検討するため《図2》の絶対得票率のグラフを見てみたい。ここでは、棄権が減って投票率が上がる中で民進黨が得票数を大きく伸ばしたことがわかる。この動きは、民進黨が中間票・浮動票の開拓に成功したことを示す。一方、国民党の絶対得票率は、楊秋興の得票を無理やり加えても前回の勢力を維持するのがやっとで、市ごとに票の動きは異なるが、全体としては新たな票の開拓はできていない。しかし、国民党は押されながらも基礎票はある程度守っている。これが三都死守につながったようである。このグラフからは、民進黨がブームを起し浮動票を相当獲得したが、国民党の基礎票を攻め切れなかったことが読み取れる。

投票率が上昇する中で増えた民進黨の票はどう解釈すればよいのであろうか。民進黨は、普段はあまり政治に関心を持たない層から支持を多く獲得した。その一部は今後 4 年間で固定票に転じる可能性もあるし、4 年後に投票率が下がれば簡単に去っていく可能性もある。普段の選挙の投票率は 60%～65%であるのに対し、総統選挙の投票率は 75%～80%に達する（2008 年は 76.3%）。高い投票率の時に出てくる層の投票行動を読むことは非常に難しい。今回の五都選挙の投票率 71.7%は総統選挙の投票率には及ばないが、ある程度

近づいている。浮動票のカテゴリーの中で票の方向がまったく異なるということもないので、総統選挙で出てくる層の投票行動の一端が今回示されたと言える。これらはうつろいやすい票であるから、その動向は選挙ごとに異なる。しかし、中間票・浮動票を狙った民進党の選挙戦略が成功したことで、民進党は総統選挙でも健闘する可能性が十分あることを示したと考えてよいであろう。

市長選挙と同時に行なわれた五都の市議会議員選挙でも民進党の躍進が確認できる。両党が獲得した議席は共に130で同数であった。今回直轄市昇格により議員定数が減ったので議席の増減の直接比較はできないが、国民党は53議席減らし、民進党は13議席増やした。得票率を見ると《表3》のように、国民党は前回の40.5%から38.6%へと1.9ポイント減少、民進党は27%から35.3%へと8.3ポイント増加した。民進党は過去最高の成績を収めた。国民党はかろうじて勢力を維持しているが、両党の差は、前回の13.5ポイントから3.3ポイントへと大幅に縮小した。親民党、新党、台聯の得票率を算入した泛藍陣営、泛緑陣営の得票率で比較しても同じ傾向を見出せる。無党籍の議員の中には国民党系が多く含まれているので国民党の実力は数字以上であるが、これまで市議会・県議会の議員選挙で弱かった民進党が、地方の基層に近い部分で力をつけてきたと言える。

《表3》 2005年&2006年および2010年五都市議会議員選挙結果

	2005年&2006年			2010年			得票率の増減
	得票数	得票率	両者の差	得票数	得票率	両者の差	
国民党	2,593,578	40.48%	13.5	2,890,154	38.63%	3.3	-1.9
民進党	1,729,903	27.00%		2,643,828	35.34%		+8.3
泛藍陣営	3,063,848	47.82%	17.3	3,136,865	41.93%	4.9	-5.9
泛緑陣営	1,956,156	30.53%		2,770,187	37.02%		+6.5

※ 前回の台北市、台北県、台中縣市、台南縣市、高雄県市の県市議会選挙の政党得票を合算した。

※ 親民党、新党の得票は泛藍陣営、台聯の得票は泛緑陣営に算入した。

半年に及んだ五都の選挙戦を振り返ると、民進党優位の構図は序盤戦から中盤戦にかけて形成された。民進党は党内の最強の五人を配置することができた。国民党は支持率が低かった新北市の現職を実績のある朱立倫に入れ替えることには成功したが、台南市と高雄市の候補は身内からも不安視された。台北市も郝龍斌市長の4年間の実績に対する市民の評価は厳しいものがあり不安を抱えていた。候補者が決まり選挙活動が始まると、序盤戦で早くも民進党の頼清徳と陳菊が台南市と高雄市で圧倒的優位を作りだし、国民党を残る三都で一つも落とせない守勢へと追いやった。民進党の予備選挙で陳菊市長に敗れた楊秋興高雄県長が離党して高雄市長選挙に出馬したことは、本来民進党の票が割れて苦戦に陥る局面であったが、国民党の候補が不人気であったため、逆に国民党にマイナスの影響が出ることになった。

中盤戦では、民進党にとって最も不利な台北市で、蘇貞昌が郝龍斌と互角あるいはそれ以上の戦いを演じた。蘇貞昌は意識して藍緑の対決ムードを避けたので、選挙戦は概して

平穩に進行し盛り上がりには欠く感もあったが、民進党三勝の可能性が出てきたことが五都全体で民進党支持者の氣勢を引き上げる効果をもたらした。蘇貞昌のピンクのポロシャツ、陽気なミニ集会・ミニコンサートの集会スタイル、インターネットを使った発信は、台北市だけでなく台湾全体に広がり、斬新なイメージと中間路線を広くアピールする大きな貢献をした。こうした選挙情勢は民意調査に投影された。

筆者は選挙前に五都全体の両党の得票率を国民党 44.8%、民進党 48.6%と予想していた。筆者の予想は、8月～10月の台湾メディアの民意調査を参考にして10月末に作成したものである。実際の結果は、国民党 44.5%、民進党 49.9%で、筆者の予想した数字と近かったのだが、各市の票の出方は予想と開きがあった。台北市と新北市では国民党の得票が予想より多く、台中市、台南市、高雄市では民進党の得票が予想より多かった。その原因としては、選挙戦終盤の11月に、陳水扁前総統の汚職裁判での有罪確定、緑陣営寄りのテレビ討論番組司会者が下品な用語で馬総統を攻撃した失言事件など両陣営の対立軸に沿う出来事が連続して発生したことで藍緑二極構造のエネルギーが高まったことが考えられる。蘇貞昌の選挙戦略はここで壁に突き当たった。郝龍斌はこの構図の中で巻き返しができた。一方、高雄市や台南市ではこの構図が民進党のプラスになった。一つ一つの出来事が台湾の南北・五都で異なる反応を引き起こし、それぞれの地域で国民党と民進党の強い方の支持がより強くなるという作用をしたようである。

選挙戦最終日に発生した銃撃事件の影響もこの延長線上に位置づけられるであろう。事件の被害者が連戦元国民党主席の息子であったため北部では同情票が出て国民党にプラスに働き、逆に南部では民進党に票を結集させる動きにつながったようである。『聯合報』と『中國時報』が選挙後に行なった民意調査では、銃撃事件で影響を受けたと解答した人の比率はどちらの調査でも4%であった（『聯合報民調／五都一役 36%緑勝 24%藍贏』『聯合報』2010年11月29日、および、「本報民調 5都選挙結果 半数國人滿意』『中國時報』2010年11月29日）。「影響を受けた人4%、うち国民党に票を入れた人2%、民進党に票を入れた人1%、その他1%」という『中國時報』の調査結果に基づいて人数を計算すると、影響を受けたのが42万7000人、うち国民党に票を入れたのが21万3000人、民進党に票を入れたのが10万7000人と大雑把ながら推測ができる。国民党に有利な票の動きが北部二都で比較的多く現れたと仮定すると、銃撃事件の影響は、当落を変えなかったかもしれないが相当大きかったことになる。台湾では信頼のおける出口調査が行なわれていないので事件の影響を検証することは困難であるが、『聯合報』と『中國時報』の民意調査を参照すれば、事件がなければ郝龍斌と蘇貞昌との得票差、および、朱立倫と蔡英文との得票差はもっと小さかったであろうということは言うてよさそうである。

今回の市長選挙は、五都それぞれの候補者の強弱とローカル・イシュー、それに全国レベルの馬政権への評価が複雑に絡み合った結果である。台北市の攻防戦は郝龍斌が再選されたが、候補者の存在感では蘇貞昌が優っていた。最終的には台北市における国民党の基礎票の厚さが効いたのだが、蘇貞昌の挑戦が終盤で藍緑の壁にはね返された原因は、イメージ戦略は成功したがそれに続く本格的な政策論述力での勝負が不十分であったからと

考えるべきであろう。民進党にとって非常に重要なシグナルである。しかし、台北市以外には民進党の勢いが目立った。国民党の支持が固かったはずの台中市で、蘇嘉全が胡志強をぎりぎりまで追い上げた。胡の多選問題、県市の合併問題、都市部と農村のバランスなどローカル・ガバナンスに重点を置いた蘇嘉全の作戦勝ちであった。国民党優勢の新北市でも蔡英文が独特のブームを作り出し両党の差を縮めた。台南市では頼清徳が予想通り圧勝し、三候補の争いとなった高雄市でも陳菊が相手を寄せつけず過半数を獲得した。台南市と高雄市は国民党の候補が弱かったから大敗したと言われるが、他に擁立できる候補がいなかったことも事実である。南部での国民党の人材不足は深刻である。

馬英九政権登場後、台北市を除き、国民党の地方組織の弱体化が進行している。台北市はもともと地方派閥が存在せず、市の党組織は退役軍人、公務員、教員の集票機能を維持している。しかし、それ以外の地方組織は事実上国民党系の大小の地方派閥・地方家族に依拠している。その集票力の弱体化は、昨年の中南部市長選挙および今年1月と2月に行なわれた立法委員補欠選挙で見られた現象であり、それが今回も現れた。

馬主席・金秘書長は、恩顧主義の地方派閥依存から脱却し、党の地方組織を後腐れの無い選挙マシンに転換することを目指している。不透明な資金投入をやめ、党職員を減らし、疑惑のある人物を公認せず清新な候補の擁立にこだわる党改革を進めようとしているが、それは地方の現状からすると国民党の伝統的集票機能を弱らせることでもある。統制が緩んだ地方派閥の票は中間票となり、今後はそれを民進党と競い合って確保しなければならない。馬政権の実績が評価され支持率が高ければよいが、そうでなければ馬英九が前回総統選挙で確保した中南部の地方票が総崩れになる可能性もある。

国民党は選挙戦で、中台関係の改善、経済成長率の上昇を実績として訴えたが、選挙民にあまり大きな関心を引き起こさなかった。それは、経済的恩恵が広く実感できる状況に至っていないためでもあるし、民進党の各候補が身近な生活の問題などローカル・イシューを強調して争点をうまくかわしたからでもある。民進党は党の方針として、馬政権の対中政策そしてその象徴と言える ECFA に反対しているが、五候補とも選挙戦ではあまり触れなかった。そして中間派選挙民を念頭においたイメージ重視の選挙戦略を展開した。民進党は蔡英文が主席に就任し党のイメージ・チェンジにある程度成功したのは確かであろう。しかし、党の方針を示す「10年政綱」はまだ発表されていないし、対中政策をどうするのかも明らかではない。今回の民進党の躍進は、政策への期待というよりも、候補者の魅力と馬政権への不満が追い風になったと見たほうがよさそうである。

馬政権の対中政策は、民進党の五候補が正面から批判しなかったことから見て、選挙民の多数派に受け入れられつつあると考えられる。しかし、広州アジア大会のテコンドーの試合でメダル候補の楊淑君選手が失格した事件では、馬政権の対応を弱腰とする批判が沸騰した。不可解な判定の背後に韓国・中国の関係者が介在しているとの憶測が広がる中、体育委員会副主任（政府のスポーツ省副長官）が「判定結果を呑み込む」と発言し馬政権の失点となった。ある大手メディアの民意調査では、事件後国民党候補の支持が明確に低下したという。今回の反韓・反中感情の広がりには合理的根拠が乏しいと思われるが、馬政

権が中国に対し台湾の主体性を十分主張していないという不満が背景にあると考えられる。このことから、台湾の主流の民意は、中台の交流拡大・経済関係拡大を支持・容認するのと同時に台湾の主体性・尊厳についてのこだわりも非常に強いと見ることができる。中国はこの二つをゼロサムとしているので両立の可能性は別途議論しなければならないが、民意の支持を得るためには両方を重視する姿勢が必要ということになる。

最後に、五都市長選挙を分析していく中で浮かび上がってきたことを整理しておきたい。

- 国民党の三都当選は現有の市政を維持したにすぎない。三都当選をもって馬政権が信任されたと判断するのは実勢を見誤る。実質的には、五都全体でほぼ過半数の得票率を達成した民進党の勝利である。
- 五都選挙の投票率が予想を上回る高い水準に達し、総統選挙の投票構造に近づいた。中間票・浮動票の開拓に成功した民進党が総統選挙でも健闘する可能性がある。
- 馬政権の支持基盤は弱っている。国民党の基礎票が民進党に切り崩されたということではないが、中間派の支持も地方の組織力も低下している。
- それとは逆に、民進党は中間派に支持を広げる手ごたえをつかみ、地方の組織力も以前に比べ強くなっている。
- 民進党は対中政策を調整する可能性がある。党内に異論はあるが、五候補とも中間派へのアピールを重視していたので、党の路線も中間寄りに動く可能性がある。しかし、陳水扁政権時代の遺産をどの程度リセットできるのかは不明である。
- 馬政権が今後どういう調整をするかは五都選挙のプロセスと結果からは見通せない。中途半端に三都で勝利したことで政権浮上に必要なリセットが十分できない可能性もある。人事刷新をするのか、対中政策のスピードを調整するのか、中南部の惨敗に危機感を深めて党改革を緩めるのかさらに推進するのか、いずれも不透明である。

結論としては、民進党が実質的に勝利したが、総統選挙の構図が固まるのはこれからで、五都市長選挙は通過点にすぎない、ということになるであろう。(2010.12.02 記)

- 本稿は「五都選挙分析」の[暫定版]です。[完成版]は2011年1月に当HPに掲載する予定です。
- 五都それぞれの選挙戦の展開を論じた「台湾五都物語各論」は12月中に掲載する予定です。

OGASAWARA HOMEPAGE

<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ogasawara/>